

群馬県邑楽郡大泉町における日本人住民と外国人住民の相互意識

Mutual consciousness of Japanese and foreign residents
in Oizumi town, Gunma Prefecture, Japan

春日 慎子

Makiko KASUGA

【要旨】

本稿では、群馬県邑楽郡大泉町における日本人住民と外国人住民の双方を対象に、日本人と外国人の互いの意識がどのように変化するかを分析し、影響を与えあう変化の要因と日本人と外国人の意識の差異を明らかにした。その結果、日本人住民の外国人住民に対する意識は、ネガティブな意識が多いことが分かった。一方、外国人住民の日本人住民に対する意識は、ネガティブな意識がほとんどなかった。すなわち、相手に持つ意識に相互関係はないことが分かった。ただし、日本人住民も外国人住民も、双方に対する意識が変わるタイミングとして、職場での交流や日本の学校に通う子どもどうしのやり取りがあった。職場や学校などで相互の交流機会をもつと、相手への意識がポジティブなものに変化することが多かった。相互に深い関わりが生まれた場合には相手に対する意識が良好に変化していた。

また、大泉町において、日本人住民と外国人住民をつなぐ存在が組織や個人ともに存在していることも明らかになった。日本人住民と外国人住民をつなぐ役割を果たしている個人すなわちメディエータは少数であるが、メディエータは両者の意思疎通をスムーズにする役割を果たしていた。

キーワード: 大泉町、日本人、外国人、メディエータ、多文化共生

1. はじめに

日本では、1990年に出入国管理及び難民認定法(以下、入管法)が改正され、日本において日系3世までの定住が認められるようになった。これにより大泉町や太田市、浜松市、豊田市などの企業城下町といわれる地方中小企業都市では日系人が外国人労働者の中心を占めるようになった。外国人人口の増加と定住化の進展に伴い、外国人の生活構造や、外国人を受け入れるホスト社会の在り様について議論されてきた。出稼ぎ外国人の生活構造に着目したものとして、例えば喜多川(1995)、渡辺(1995a, 1995b)

は、現地調査により出稼ぎ外国人の生活構造や意識を明らかにした。このなかで受け入れ側のホスト社会との摩擦や日本社会への適応など諸問題が発生していると問題提起した。また、外国人労働者の生活実態に着目した片岡(2014)は、ホスト社会において「顔の見えない存在」とされてきたブラジル人が日常生活でホスト社会の住民との接触機会が増大していることを明らかにした。

外国人住民を対象とした研究では、外国人の生活実態を解明することに重点が置かれており、外国人の日本人住民に対する意識には着目されていない。また、これらの研究では、外国

人労働者を分析対象としたものが多い。しかし外国人の定住化が始まっている中で、日本の企業に雇われている外国人労働者だけでなく、日本で生活している外国人住民について職業にかかわらず調査する必要があると考える。

ホスト側である日本人住民に焦点を当てた研究には、様々な角度から分析したものがある。その中でも大槻(2006)、濱田(2008)、山本・松宮(2010)、福本ほか(2015)は、日本人の外国人に対する意識やその規定要因の解明を試みている。その規定要因として、福本ほか(2015)は社会地理学の視点から、日本人住民の住宅種別の差異による外国人との接触機会の多寡が意識の違いに影響するとした。

濱田(2008)は、社会学の視点から外国人住民に対する日本人住民の寛容性と排他性を規定する要因を4つに整理し分析した。その規定要因とは、①個人属性仮説(日本人住民の外国人住民に対する寛容性が、住民の個人属性によって規定されるとするもの)、②接触仮説(外国人との接触や交流が、外国人に対する寛容性を増加させるというもの)、③ネットワーク仮説(友人との交際のあり方などの、人的ネットワーク特性が、外国人に対する寛容性に影響を与えているとする考え方)、④居住地効果仮説の4つであり、これらを用いて日本人住民の意識の変遷とその規定要因の解明を試みている。そして外国人比率の上昇とともに認識される外国人住民への「排他的意識」が、日本人住民の社会的立場により異なること、外国人住民への「排他的意識」と「生活悪化意識」とでは規定要因が異なることを明らかにしている。しかし濱田(2008)の研究では、1995年と2005年に行った無作為に抽出した日本人住民の統計的なデータを主に使用しているため、統計数値上での変化しかつかめていない。外国人に対する意識や変化の要因を明らかにするためには、統計によって平均化された数値としてとらえるのではなく、丁寧な聞き取り調査によって個人の内面に迫る必要がある。

このように外国人住民やホスト社会住民に焦点を当てた研究では外国人と日本人どちらか一方の視点から地域の実態を解明する研究がされている。異なる文化、国籍の住民と日本

人が混在する地域を研究するにあたり、外国人住民とそのホスト社会住民、両者からの見解を考察することは不可欠であると考ええる。

また、日本人住民の意識の規定要因については、先に蓄積されてきたものが多くある。しかし、長い期間にわたり同じ地域に日本人住民と外国人住民が暮らしていれば、個人の属性などの規定要因にかかわらず、日本人住民と外国人住民の意識が相互に変化するタイミングがあると考ええる。一時点における日本人の外国人に対する意識だけをみるのではなく、意識の変化の過程に着目することが必要である。総務省(2006)は、多文化共生を「国籍や民族などの異なる人々が、互いの文化的ちがいを認め合い、対等な関係を築こうとしながら、地域社会の構成員として共に生きていくこと」と定義している。日本人住民と外国人住民がどのようなことをきっかけに互いに寄り添えるようになるのか検証することは重要である。本稿では、日本人と外国人の互いの意識がどのように変化するかを分析し、影響を与えあう変化の要因と日本人と外国人の意識の差異を明らかにする。

本稿の対象地域は、群馬県邑楽郡大泉町である¹⁾。大泉町は外国人集住都市会議の会員都市であるため、多文化共生に向けて問題意識の高い地域と思われる。外国人集住都市会議とは、南米日系人を中心とする外国人住民が多数居住する自治体が集まり、多文化共生へむけての課題解決を目的としている²⁾。また、2017年現在、大泉町には7,180人の外国人がおり、町の総人口に占める外国人の割合は17.27%である³⁾。外国人比率は全国市区町村で大阪府大阪市生野区に次いで第2位の高さである⁴⁾。大泉町は規模が小さいわりに外国人の割合が高い。そのため、日本人と外国人の接触機会が多く、各々が相互に対する意見や意識をもっていると考えられる。

本稿では、居住地を特定せず日本人住民と外国人住民にアンケート調査と聞き取り調査を実施し、相互意識を明らかにし、相互意識の差異について考察していく。

なお、本稿では、大泉町に住む日本人を日本人住民、大泉町に住む外国人を外国人住民と呼

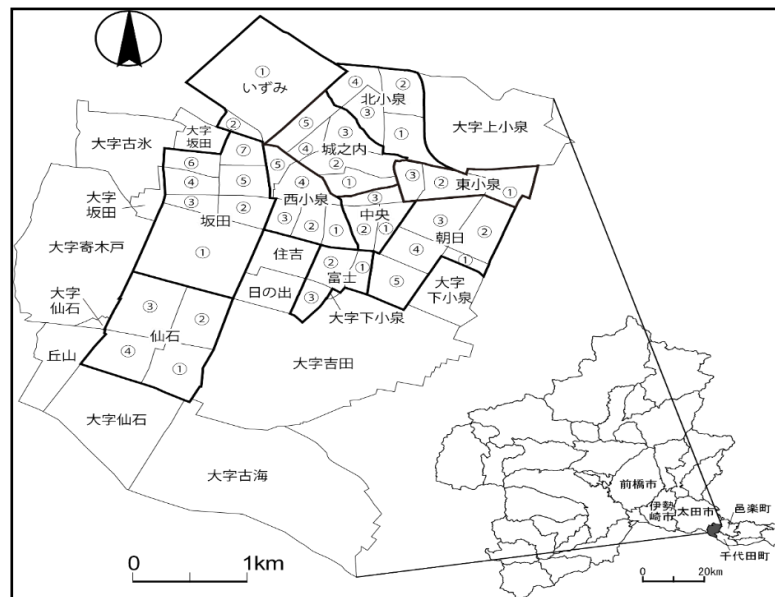


図1 大泉町の位置と地区名

注) 数字は、太枠で囲まれた地区の丁番号を示す。

(筆者作成)

ぶ。ただし、日本人、外国人と表記することもあり、それは特に住民であることを意識せずに日本人、外国人という対象を示すときに使用する。また、アンケート調査や聞き取り調査で得た調査対象者の語りでは、呼び方が多々ある場合がある。語りの意味あいが変わってしまうことを避けるために、調査で得た語りでの用語は、そのまま使用した。

表1 群馬県内上位5市の製造品出荷額
(2014年)

	市町村	製造品出荷額 (万円)
1	太田市	525,408,293
2	伊勢崎市	112,169,050
3	高崎市	63,355,607
4	大泉町	52,321,533
5	前橋市	52,066,794

(「統計ぐんま平成26年工業統計調査結果」より作成)

2. 対象地域の概要

2-1. 大泉町の概要

群馬県大泉町は群馬県の南東に位置し、東は楽町、千代田町、西は太田市、南は利根川をはさんで埼玉県熊谷市に隣接している(図1)。大泉町は、1957年に小泉町と大川村が合併して誕生した。面積は18.03km²と群馬県で一番小さい。2017年12月の人口は41,876人、世帯数は19,259世帯である⁹⁾。大泉町には、北部のいずみ一丁目に富士重工業工場、中央の坂田一丁目にはパナソニックの工場が立地しており、工業が盛んである。

大泉町が工業の町として発展した基盤は第二次世界大戦中にさかのぼる。喜多川(1997)によれば、1942年11月に隣接する太田市の工場

と並んで中島飛行機小泉工場が開所した。終戦によって小泉工場にはアメリカ軍が進駐することになるが、1959年、返還された工場跡地に三洋電機東京製作所が誘致され、1981年には、旧中島飛行機の飛行場跡に富士重工が大泉工場の建設を始めた(喜多川1997)。

表1は2014年における製造品出荷額の県内上位5市町村である。大泉町は製造品出荷額が5232億円と、県内第4位と上位であることがわかる。こうした工業の発展が、外国人労働者を受け入れる基盤となった。

2-2. 出稼ぎ外国人の始まりと定住化

大泉町においてブラジル人の割合が増えはじめたのは、1989年である。翌年1990年には

大泉町に住む外国人人口の半数以上をブラジル人が占めた(図2)。その理由として、1990年6月に入管法が改正されたことが挙げられる。渡辺(1995a)によると、入管法の改定により、不法労働者助長罪の罰則が雇用主側にも課され、外国人の不法労働者を締め出す方策がとられた。そして、日系人には、「日本人の配偶者等(日本人の配偶者、日本人の子として出生した者及び日本人の特別養子)」「定住者(日本人の孫など、日系2世及び3世である外国人)」という、就労を含め日本での活動に制限がない在留資格が与えられ、合法的に単純労働にも就けることになった(渡辺 1995a)。これによって、大泉町の中小企業に勤め、出稼ぎ外国人として来日する日系人が増え、東毛地区雇用安定促進協議会が県内で初めて1989年12月に大泉町内の中小企業を中心に結成された。これは大泉町内の中小企業が組織し、合法的かつ安定雇用のできる日系ブラジル人の受け入れをするためである。

東毛地区雇用安定促進協議会⁹⁾は入管法に準拠して不法就労者を雇用せず、慢性的な人手不足を解消する切り札として、国や県の指導を受けて創設された。1990年3月には役員5人がブ

ラジルを訪れ、現地調査の終了後、ファックスで常時大泉町とつながった日系人雇用窓口をブラジルに設置した。東毛地区雇用安定促進協議会を通した日系ブラジル人のブラジルから日本への移入ルートは以下のようなものであった。まず、東毛地区雇用安定促進協議会が渡航前に各社の賃金や休日、職種、福利厚生などの詳細情報を日系人に提示する。就職希望者は東毛地区雇用安定促進協議会加盟のリストから関心のある企業を選択する。そして渡航に必要なビザ、書類を東毛地区雇用安定促進協議会が整え、企業が日系人と直接雇用契約を結ぶというものである。

第一団として、1990年5月に約40名が来日した。東毛地区雇用安定促進協議会の結成時、東毛地区雇用安定促進協議会の加盟企業は46社であったが、1991年には69社を上回った。このような受け入れが、バブル崩壊後も一貫して日系人が集住しはじめた源泉になったという。

東毛地区雇用安定促進協議会は1999年4月に解散した。解散の理由は、濱田(2006)によれば「1990年代以降の景気の迷走、民間の人材派遣

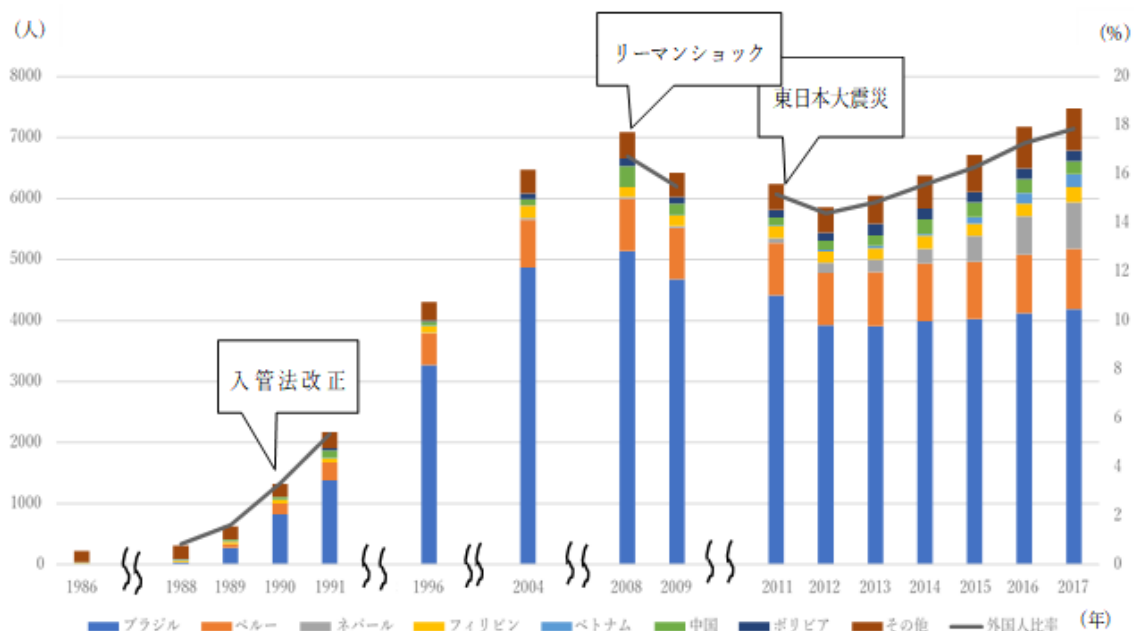


図2 大泉町の外国人人口と外国人比率の推移

注) 1986～2016年は12月31日時点、2017年は7月31日時点の数値である。
(大泉町国際協働課提供資料より作成)

業者による人材供給ルート の確立など諸条件の変化によりその役割を終えた」とされている。しかし、この協議会が作った日系ブラジル人の日本への渡航プロセスは、外国人労働者確保のモデルとして、また外国人の来日ルート開設の始まりとして大きな影響があった。

2-3. 大泉町の人口と分布

2017 年 7 月の大泉町における外国人人口は、7,481 人であり、大泉町総人口に占める外国人人口の割合は 17.86%と過去最高の数値である⁷⁾。国籍別に外国人人数を見ると、第 1 位ブラジル 4,186 人、第 2 位ペルー 992 人、第 3 位ネパール 755 人、第 4 位フィリピン 252 人、第 5 位ベトナム 214 人、第 6 位中国 213 人、第 7 位ボリビア 181 人である⁸⁾。

図 2 は大泉町の外国人を国籍別に色分けした外国人人口と大泉町における外国人比率の推移を示したものである。図 2 をみると 1989 年以降、外国人人口のうち、ブラジル人の割合がトップである。2011 年からはネパール人が増えはじめ、2017 年では 3 番目に多くなった。2009 年には 2008 年のリーマンショックを受けて外国人人口が減少した。大泉町内では、リーマン

ショックによって職を失い、公園などでホームレス生活をする外国人もいた⁹⁾。さらに、2011 年の東日本大震災が起きた年をみると、翌 2012 年に外国人人口が減少したことが分かる。外国人住民の話によると、東日本大震災を受けて、地震が怖くなって帰国した人がいたり、母国の家族から帰国を促されたりした人がいたという。

2017 年 9 月時点での大泉町における在留資格別外国人割合をみると、永住者と定住者を合わせて 78%を占める。多くの外国人が永住者、定住者であることがわかる(図 3)。

図 4 および図 5 は、2000 年から 2015 年における町丁別人口密度と日本人外国人割合を比較したものである。これをもとに大泉町における外国人の居住地の変化について分析していく。

2000 年には、坂田 7 丁目と朝日 1 丁目、丘山の人口密度が高い(図 4)。外国人総数は、坂田 3 丁目、坂田 4 丁目、坂田 5 丁目、坂田 7 丁目に多く、坂田に外国人が多いことがわかる。そして、富士 2 丁目以外では、日本人がいるところには必ず外国人も生活をしている。人口密度が高い地域に外国人が多いのではなく、町内はど

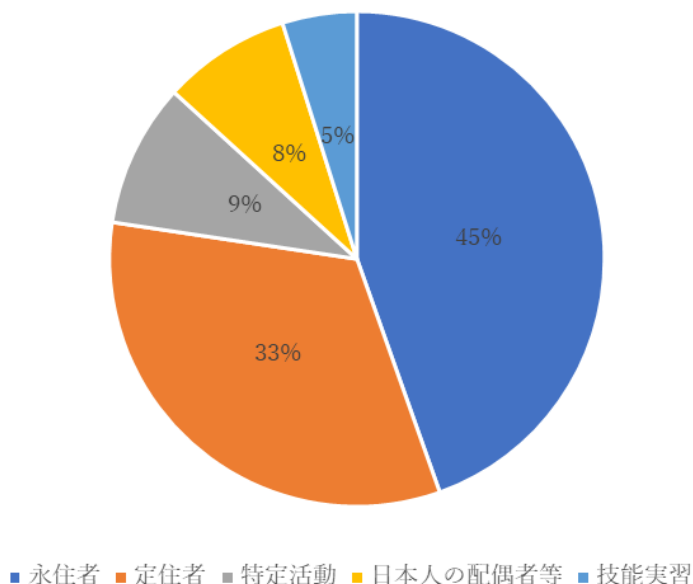


図 3 大泉町における在留資格別外国人割合(2017 年 9 月)

(大泉国際交流協会提供資料より作成)

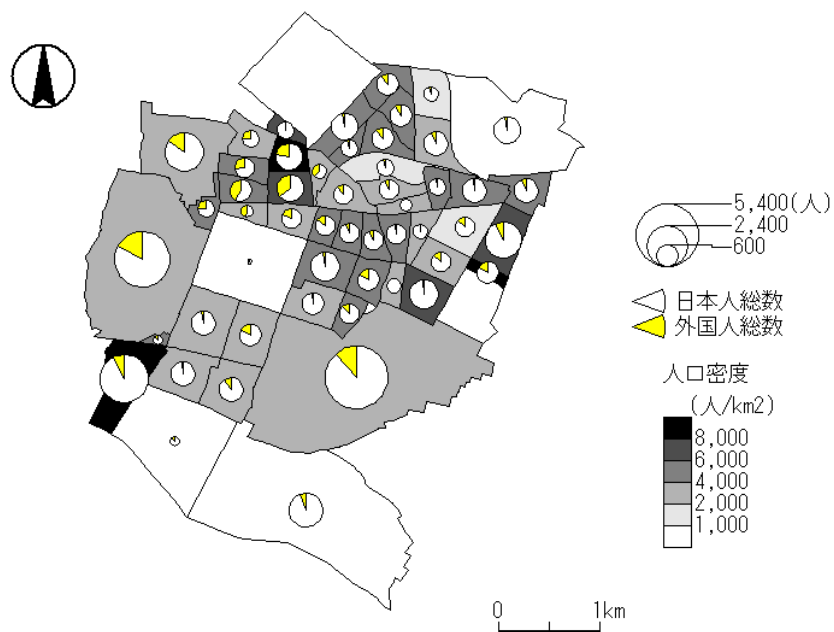


図4 大泉町の人口密度と日本人外国人割合(2000年)
(国勢調査平成12年より作成)

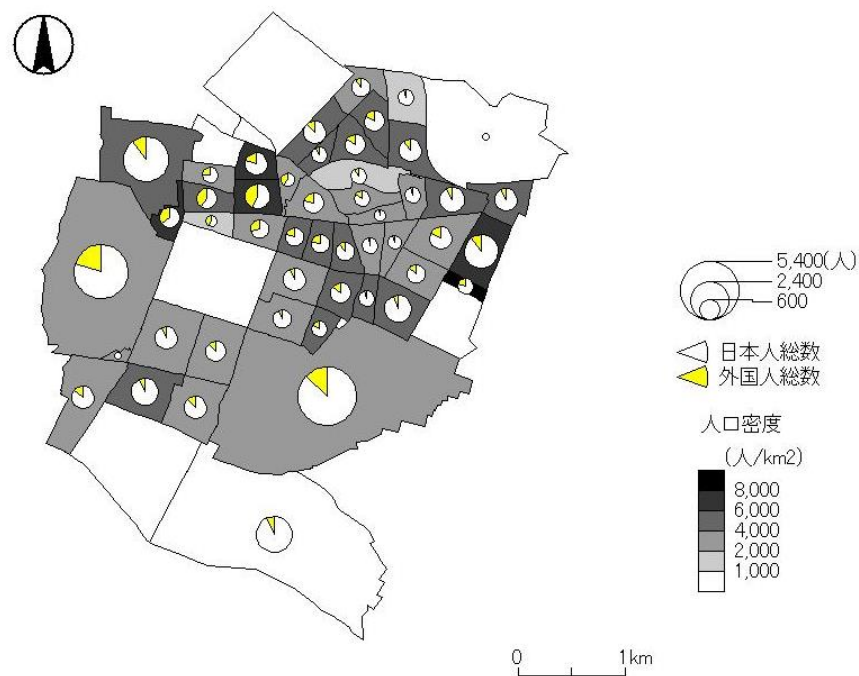


図5 大泉町の人口密度と日本人外国人割合(2015年)
(国勢調査平成27年より作成)

こにでも外国人が住んでいることがわかる。

2015 年でも、2000 年と傾向は変わらないが、西小泉 4 丁目、西小泉 5 丁目、大字吉田、大字寄木戸、大字古氷など、2008 年のリーマンショックや 2011 年の東日本大震災の影響で外国人人口が一時的に減少した地区もある(図 5)。

橋元(1997)によると、外国人は大利根工業団地に居住しており、日系人はどこにでも住んでいて、アパートや貸家のある区域に多いという。貸家が多いのは、坂田東部・西部、寄木戸北部・南部、吉田東部・西部であり、西小泉は、国道 354 号線を挟んだ地域の人口が商店街に集中しており一番多く、丘山に雇用促進住宅があるという。坂田、寄木戸ではどの年代でも外国人人口が多い。現在も大泉町内でとくに外国人が多い地域であることがうかがえる。雇用促進住宅があるという丘山は、徐々に外国人人口が減っている。戸井田(2005)によれば、大泉町が日系ニューカマーの集積を可能にしたのは、住居場所が確保されていたからであるという。外国人住民が住みよい場所が、大泉町内に形成されているといえる。

地区別に外国人総数をみていくと、全体的に西小泉に外国人総数が多い。地域住民の話によると、西小泉は以前、日本の店が並ぶ商店街があった。現在、西小泉は日本の店舗があった空き店舗を利用し、外国人向けのスーパーや飲食店が点在している。町の店舗が外国人によって変化しているが、西小泉に住む外国人は少ない。外国人向けの店舗ができて、もともと日本人中心の商店街があり、古くから日本人住民が住んでいる地域に外国人は入居しにくいと思われる。

3. 日本人住民の意識

大泉町在住日本人が外国人住民にどのような意識を持っているのかを明らかにするために、大泉町内の日本人住民 28 人にアンケート調査と聞き取り調査を実施した。ここで中心的に使用するデータについては、筆者がアンケート調査を集計したものと聞き取り調査における個々の日本人の語りである。語りについては、

会話形式で進め、メモをしたものである。日本人住民に対するアンケート調査は 2017 年 9 月 24 日と 10 月 22 日、11 月 26 日に大泉町観光協会主催の「活きな世界のグルメ横丁」、大泉町文化むら、大泉町勤労複合福祉施設いずみの杜で実施した¹⁰⁾。

アンケート項目は全 8 問である。Q1～Q4 は調査対象者の属性に関するものである。Q5 は「大泉町に外国人が住むようになってどのように変化を感じているか」という質問に A～F の該当する項目に丸を付けて回答するものである。Q6 は外国人住民との接触について、接触場所や接触機会について聞く設問である。Q7 は、「外国人に対する考えが変わったことがありますか」という質問で A～E の該当する項目に丸をつける設問である。Q8 は Q7 で質問したことと関連して、外国人に対する考えが変わったときのタイミングを A～I の項目から選ぶ設問である。

3-1. 外国人住民との接点と接触頻度

大泉町における調査対象の日本人属性は、表 2 の通りである。調査対象者の性別は男性 12 人、女性 16 人である。日本人住民のほとんどが近隣に外国人が住んでいる環境で生活している。外国人と接する機会の有無でも調査対象者 8 を除くすべての人が外国人と接する機会を有している。接触機会はスーパー、飲食店、観光イベントや地域の祭りが上位を占め、日本人の生活活動内での接触機会が多いことが分かる。日本人住民と外国人住民の生活行動範囲が一致してきているといえよう。

3-2. 外国住民に対する日本人の意識

表 3 は、「大泉町に外国人が住むようになってどのような変化を感じていますか」というアンケート調査に対する回答をまとめたものである。

「A 外国人との交流があり、生活が楽しくなった」では、「まったく思わない」が 15 人と、半数以上を占めた。「とてもそう思う」、「そう思う」と回答した 7 人は、ポジティブな印象を外国人住民に持っているように見えるが、表 4 での調査対象者の語りの中にはポジティブな意

表2 大泉町における調査対象の日本人属性 (n=28)

調査対象者	現住地	年齢	性別	近隣外国人の有無	国籍	大泉町居住歴	外国人と接する機会の有無
1	朝日	20~30代	男	○	ブ	2017~	○ スーパー、飲食店
2	朝日	40~50代	女	○	ブ	1984~	○ スーパー、病院、公園
3	朝日	40~50代	女	○	不明	—	○ 職場、いつでもどこでも外国人がいる
4	朝日	50~60代	男	○	ブ	—	○ スーパー、観光イベントや地域のお祭り
5	朝日	50代	男	×	—	1958~	○ いずみの杜
6	朝日	60~70代	女	○	不明	生誕後~	○ スーパー
7	朝日	60~70代	男	○	ブ・タ	生誕後~	○ スーパー
8	朝日	70代	男	○	ベ・ブ・フ	1939~	×
9	北小泉	40~50代	女	○	ブ・ペ	結婚後~	○ いつでもどこでも外国人がいる
10	坂田	10代(高校生)	男	○	ブ・ベ	1999~	○ 学校、観光イベントや地域のお祭り
11	坂田	60~70代	男	○	ブネベ	1972~	○ 学校、スーパー、飲食店、町役場、バス、観光イベントや地域のお祭り
12	坂田	70代	男	○	ブ	1975~	○ 観光イベントや地域のお祭り
13	城之内	10代(高校生)	男	○	ブ・中	1999~	○ 学校
14	城之内	40~50代	女	○	ブ	2004~	○ スーパー、飲食店、町役場、銀行、病院、職場
15	仙石	50代	男	○	ブ	生誕後~	○ スーパー、飲食店、町役場、銀行、病院、公園、観光イベントや地域のお祭り
16	東小泉	70代	女	×	—	1942~	○ スーパー、飲食店
17	富士	60代	女	○	不明	生誕後~	○ スーパー
18	富士	60~70代	女	○	不明	生誕後~	○ スーパー
19	富士	70代	女	○	不明	結婚後~	○ スーパー
20	富士	70代	男	○	ブ	1962~	○ 近所の外国人と会ったとき
21	吉田	40~50代	女	○	不明	1977~	○ いつでもどこでも外国人がいる
22	吉田	40~50代	女	○	ブ	1989~	○ いつでもどこでも外国人がいる
23	吉田	40代	女	○	ブ	1974~	○ スーパー、飲食店、町役場、銀行、病院、公園、観光イベントや地域のお祭り、職場
24	吉田	50~60代	男	○	ブ	1980~	○ 観光イベントや地域のお祭り
25	吉田	60代	女	○	ブ	1989~	○ スーパー
26	吉田	60~70代	女	×	—	1968~	○ 飲食店、いずみの杜
27	吉田	60~70代	女	○	中	1948~	○ いずみの杜
28	—	40~50代	女	○	ブ	—	○ スーパー、病院、公園、観光イベントや地域のお祭り

注1) 「国籍」の「ブ」はブラジル、「タ」はタイ、「ペ」はペルー、「フ」はフィリピン、「ネ」はネパール、「中」は中国であることを示す。

注2) 「—」は不明であることを示す。

(アンケート調査より作成)

表3 日本人の意識の変化 (n=27)

	とてもそう思う	そう思う	あまり思わない	まったく思わない
A 外国人との交流があり生活が楽しくなった	1	6	5	15
B 町がにぎやかになった	3	12	8	4
C 日本食以外に外国の料理を食べる機会が増えた	2	3	10	12
D 町の知名度が上がった	16	9	1	1
E 治安が悪くなった	3	10	11	3
F 生活環境が悪くなった	1	4	19	3
G 外国人がいない店を選び出掛けるようになった	1	4	16	6
H 外国語を話す機会が増えた	1	5	4	17
I 外国人と働く機会が増えた	1	3	9	14

(アンケート調査より作成)

見は見られなかった。

「B 町がにぎやかになった」では、「そう思う」が12人と多い。しかし、「とてもそう思う」、「そう思う」では計15人、「あまり思わない」、「まったく思わない」は計12人と、にぎやかになったと思う住民と、にぎやかになったとは思わない住民で意見が分かれた。町がにぎやかになったと感じているか聞き取りをしたところ、にぎやかになるという意味をプラスに捉える人とマイナスに捉える人がいた。プラスの意見は、外国人がいることで町が活性化したというような意味合いを含んだ考えである。マイナスの意見は、外国人がいることでの騒音や生活上での不快を感じ、そういうマイナスな意味でのにぎやかという考えであった。

「C 日本食以外に外国の料理を食べる機会が増えた」では、「あまり思わない」、「まったく思わない」が計22人と、日本人住民の多くが外国の料理を食べる機会が少ないとわかる。大泉町内には、外国の料理が食べられる店が14店舗あり、さらに「活きな世界のグルメ横丁」というイベントが年に8回大泉町内で開催され、ブラジル、ペルー、ロシアなどさまざまな国の店舗が出店しているものの、日本人住民の食文化に外国食を取り込むことは難しいといえる¹¹⁾。

「D 町の知名度が上がった」では、「とてもそう思う」と「そう思う」の計24人と、多くの人が、外国人がいることで町の知名度が上がったことを実感している。大泉町はブラジルタウンと称し、観光イベントや町づくりを進めているため、この成果と思われる。

「E 治安が悪くなった」では、「とてもそう思う」、「そう思う」が計13人、「あまり思わない」、「まったく思わない」が計14人と意見が分かれた。一方で、自身の生活にどれほど悪影響があるのかを聞いた「F 生活環境が悪くなった」では、「とてもそう思う」、「そう思う」が計5人、「あまり思わない」、「まったく思わない」が計22人と日本人住民の生活環境に外国人住民が悪影響を与えていると考えている人は少なかった。

「G 外国人がいない店を選び、出かけるようになった」では、「あまり思わない」、「まった

く思わない」が計22人と、多くの日本人住民は生活活動内で意図的に外国人との接触を避けようとはしない傾向にあることがわかる。

「H 外国語を話す機会が増えた」では、「まったく思わない」が17人と外国語を話す機会のない日本人住民が多かった。外国人を見かけたり、生活活動内に外国人が存在したりすることはあっても、外国人に寄り添い、交流を持つ日本人住民は少ないといえそうである。

「I 外国人と働く機会が増えた」では、「あまり思わない」、「まったく思わない」が計23人である。外国人と一緒に働いたことのある日本人はそれほど多くないことが分かる。

次に調査対象とした日本人住民の語りから外国人住民への意識を読み解いていく(表4)。調査対象者にとって「日常生活の中で外国人が居ることは普通であり」、「どこにでも外国人がいることが当たり前」、「町内はどこにでも外国人がいる」というように、外国人が日本人住民の生活内に存在することが当たり前だと感じている(表4：調査対象者2、3、9、15)。外国人と会えば挨拶をする関係の者もいる(表4：調査対象者9、17)。日本人住民の外国人住民への意識の一つとして、外国人住民が自身の身近にすることが普通であり、挨拶程度の接点があるということがわかる。

次にアンケート調査 Q7「外国人に対する考えが変わったか」について分析する。その結果、「外国人に対して特に思うことがない」が6人と、外国人に対して特に興味関心がない日本人がいることがわかる。また、「昔は外国人が嫌いだったけれど、日本人と同じように外国人と接するようになった」が4人、「昔は外国人が嫌いだったけれど、日本人と同じように外国人と接するようになった」が2人と、外国人がいる環境に月日が経つごとに慣れ、外国人を否定的に感じていた意識から肯定的な意識に変化している日本人もいる。「外国人が住み始めた当初は外国人に友好的だったが、現在は嫌だと思うことがある」と回答した日本人住民は1名であった。Q7からは、外国人に対して特に思うことがない日本人と、以前より外国人に対する意識が肯定的になった人が多いことがわかる。

次にアンケート調査 Q8「外国人に対する考

表4 外国人との接点に関する語り

調査対象者	外国人との接点に関する発言
2	日常生活の中で外国人が居ることは普通であり
3	どこにでも外国人がいるのが当たり前
9	いつでもどこでも外国人がいる....外国人と接する事はほとんどありません.外国人をみかけることは町内のいたる所いつもです.自宅の前のアパートには,外国人が住んでいます.最近,ブラジルとペルーの国旗が飾ってあるリサイクルショップがすぐ近くにできました.外国人が頻繁に出入りしていますが関わる事はありません.ゴミ出しの時など会えば「おはようございます」と声を掛けるくらいです
15	町内はどこにでも外国人がいる
16	外国人と接する機会がない
17	外国人と会えば挨拶をする関係.あの人は,あそこに住んでいる人だという認識
18	近隣のアパートは大体外国人.挨拶をされたらする.
20	近所の外国人と会ったときに少し接する.

注) 調査対象者の番号は表2に対応する。

(聞き取り調査より作成)

えが変わったタイミング」についての回答を分析する。その結果、「外国人と住まいが近くなったとき」4人、「外国人の知り合いや友人ができたとき」3人、「外国人と地域活動と一緒に参加したとき」1人、「外国人と一緒に働いたとき」3人、「外国人と一緒に授業を受けたとき」2人、「子どもや親せきが外国人と同じ学校に通ったとき」2人、「ブラジルタウンとして大泉が観光地化し外国人と接する機会ができたとき」1人、であった。外国人に対する考えが変わるタイミングは、外国人を見かける、挨拶をする程度の接点ではなく、職場や学校で日常的に接するなどもう一步進んだ外国人住民との交流が、日本人住民の外国人住民に対する意識の変化に結びついていることが分かる。

表5は、調査対象者による外国人へのポジティブな意識の語りである。Q8の回答でも見られたように、外国人と交流を持った日本人住民は、外国人住民の頑張りや人柄の良さを実感し、外国人に対するあまり良くない固定概念やイメージを払拭し、自分たちと同じ人であるという認識に変化したことがわかる。日本人住民でも生活ルールを守っていない人もいることを

認識し、日本人住民と外国人住民を対等にみて、日本人住民もしっかりしていこうと意識を新たにしている人もいる(表5:調査対象者2、27)。また、外国人住民が大泉町に住みはじめてから約30年が経ち、外国人住民が身近にいる環境に慣れてきたということもポジティブな意識をもつ要因とみられる。一方、表6は、調査対象者による外国人へのネガティブな意識に関する語りである。外国人住民のマナーの悪さや騒音などについて苦言を呈している発言が多くみられる(表6:調査対象者2、12、15、25、26)。

「外国人と関わりたくない」という、外国人住民に対して強い拒絶感を持つ人もいる(表6:調査対象者12、15、19)。外国人は任意保険に加入していないことが多く、事故を起こしても外国人が逃げてしまうことが多いということを挙げていた。

大泉町は、「ブラジルタウン」と呼ばれ、ブラジルを活かした観光イベントが行われているが、それらのイベントに参加する大泉の日本人住民は少なく、「観光イベントなどには特別行こうとは思わない」という語りからもわかる(表

表 5 外国人へのポジティブな意識に関する語り

調査対象者	外国人へのポジティブな意識に関する語り
2	…子どもさんが大きくなり町内で仕事をしている所を見ると異国の地で頑張られたという思いがあります。…言葉の壁を乗り越え一生懸命に仕事を覚えようとしている姿に受け入れる側もきちんとした対応でありたいと思いました。
3	近くに外国人が住んでいても何も思わない。
4	近くに外国人が住んでいることはよい。(明るい) 大泉町がブラジルタウンとして観光地になっていることも大変良い事と思う。
10	外国人との交流が楽しくなり、話の幅が広がった。外国人の日常生活などを知るようになったから外国人に対する意識が変わった。
11	ポルトガル語の勉強をしてみたことがある。ラジオや新聞を使って、覚えた単語を近所の外国人にはなしてみたらその言葉をきっかけに会話が広がった。外国人も日本人も一緒に生活している人間である。ベトナム人が逮捕された事件に関しても、日本人でも事件を起こすので特別何が、というわけではない。娘が4人いる。1人くらいは外国人と結婚するのではと思っていたよ。
13	外国人と一緒に働いたときに、外国人でもいい人がいることが分かって意識が変わった。日本人でも悪いことをする人はいる。人間みんな一緒！
16	外国人が外国で生活しているのはすごい！月日が経って外国人を気にしなくなってきた。
18	昔よりも今のほうが外国人に対する恐怖感は少なくなってきた。慣れてきたからかな。
20	今も昔もそんなに外国人が嫌ではない。
21	学校、地域の活動には不参加だが子どもを通してお願いできるようになった。…良い方もいる。
23	みなさん、日本に長く住んでいるので日本語も上手で良い方が多いです。
27	日本人も慣れてきた。ゴミ出しなど、日本人だってルールを守れていない場合もある。家を建てている外国人もいる、えらい！中華街みたいな町になればいい。外国人だからどうのこうのと思わないようにしたい。日本人が外国に行ったら同じ境遇になるわけだから、同じ地域で生活していればお互い様。
28	外国人が近くにいることが自然、いることに特別に違和感はない。

注) 調査対象者の番号は表 2 に対応する。

(聞き取り調査より作成)

6：調査対象者 11)。日本人住民は、外国人住民が参加しているイベントや行事に参加しようと思っていないのが現実である(表 6：調査対象者 6、26)。特に高齢者の多くは、外国の料理が口に合わないと感じている(表 6：調査対象者 17)。表 7 は調査対象者による外国人の変化に関する語りである。昔よりも現在のほうが外国人のマナーが良くなった、印象が良くなったという変化を感じている人がいる(表 7：調査対象者 15、17)。良くなってきた要因として、外国人が日本の習慣に慣れていていると感じている人が多い。一方で、マナーが守られるようになったと感じつつも、未だに不満を持っている人もいる(表 7：調査対象者 21)。変化の要因として、外国人の子どもたちが日本の学校に通って日本

のスタイルを学び、それが子どもを通して親に伝わっていると実感している人もいる。本稿の調査対象者は、2 名の高校生を除く 24 名は、20 歳～70 歳までの大人である。外国人住民と学校が一緒であったというような濃い接点がないため、日本人住民は外国人住民に対して言いたいことがあってもそれを直接話すことはためらってしまうという意識がある。注意するとどんな反応があるのか怖いという意識があり率直な意見交換が難しいことが分かる(表 7：調査対象者 21)。このことは、外国人住民の子どもが自然と学校生活の中で日本のスタイルを知ることができれば、子どもを通して相互の柔軟な意思疎通への糸口となる可能性があることを示唆している。

表6 外国人へのネガティブな意識に関する語り

調査対象者	外国人へのネガティブな意識に関する語り
2	…国の習慣の違いでマナーがちよっと首をかしげる所もあります。
6	外国人がいる分には構わない。昔も今も関わる事は嫌なので関わらないようにしている。町としては観光資源として向こうの人が注目されている。それについていけない部分がある。
8	外国人に対して友好的でありたいし大切にしたい気持ちはあるけれど
9	外国人が大勢いるから分かりませんが大泉は治安が悪いそうです。私は特に感じませんが、日本人にも悪い人はいますし、外国人でも立派に大泉で生活している人もたくさんいます。ただ、本当に関わる事はありません。こんなにたくさんいるのに私たちはポルトガル語を話せないし、外国の人も日本語を話さなくても生活できます。まったく別のところで生活しているのです。お互い関わらなくても生活できるのです。ちょっと寂しいですね。…大泉がブラジルタウンと呼ばれることはブラジル人が多いし仕方ないのかなー。もっと一緒にできることがたくさんあるといいなあ。子供たちのことが心配。両親が日本語が話さなくて、仕事が忙しい。クラスの中でうまくやっていけない。非行に走る。経済的に豊かな人はブラジル人の学校に通う。私たちももっと積極的に関わる努力をしたほうがいいのか。おたがいに。
11	観光イベントなどには特別行こうとは思わない。
12	外国人は複数人で集まっていることが多くてコンビニとかにいてうるさい。運転が荒く横断歩道を止まらない。むかし、娘が外国人と事故を起こして泣き寝入りしたことがある。
14	日本に永住を考えていて、日本語も習得し、日本文化に馴染もうとする外国人は歓迎するが、日本語も習得しようしない外国人は歓迎しない。日本に住むのなら税金など日本人と同じようにしっかりしてほしい。中には、一軒家を建ててしっかり生活している外国人もいる。皆がそうなって欲しい。どこにでも外国人はいる。あまりプラスには思っていない。
15	音楽など大きな音を出すことがあるので、気になることが時々ある。…共生（日本人と同じ水準の生活ができる）となるにはあと10～20年かかるだろう。車の任意保険とか入っているのかかなり心配。とてもいい車に乗っているが事故を起こしたとき泣き寝入りする日本人がいると聞いた。
17	外国人は都合が悪くなると外国語を話すからコミュニケーションがとれない。飲み屋さんが多いイメージで入りにくく、外国語表記ではなんて書いてあるのかわからない。そもそも食事が合わない。外国人の店がある。西小泉は昔、商店街だった。その頃はとても良かった。よく西小泉に出かけた。いまは大泉まつりに行く時
18	外国人が住み始めてから時間が経ってもなんとなく違和感がある。外国人はどこに行ってもいるから、良くも悪くもない。運動会とか、外国人同士がまとまっている。日本人も。
19	自分に悪影響が無ければ外国人がいる分にはよい。外国人とは特に関わらない。大泉まつりも向こうの人に占領されている。一軒家やアパートで部屋をシェアして外国人は住んでいる。良い車（高い車）に乗っている。だけど事故を起こすと泣き寝入りだよ。外国人は保険に入っていないことが多いのだよ。大泉では外国人も生活保護が受けられるらしい。だから住みやすく外国人が集まってきている。
21	学校、地域による活動に無反応…なにかと日本人が我慢することが多いと思います。
25	良くない人が1人でもいると外国人全体の印象が悪くなる。大泉にすればお金がもらえると知って外国人が集まる。外国人は昔も今も嫌。隣の外国人の家が、BBOで煙がすごかったり、音楽の音や車のエンジンをかけっぱなしだったり迷惑なことが多い。道路を車でふさいでいたことがあって警察に連絡したことがある。外国人と関わりたくない。接したくない。
26	外国人が病院とかでうるさい。大泉まつりには外国人が多いから行かない。リーマンショック、東日本大震災が起きて外国人が少なくなった。

注) 調査対象者の番号は表2に対応する。

(聞き取り調査より作成)

相反する意見も見られた（表7：調査対象者25と27）。1989年頃の出稼ぎで日本に外国人が来日していたときと現在外国人の定住化が進んでいる時代を比べ、出稼ぎの時代には、「顔の見えない定住化」（梶田など2005）と言われるように、出稼ぎ外国人が自宅と職場の行き来しかしていなかったときは、日本人住民との接点がほとんどなく、外国人への不満も生じていなかった。しかし、外国人が家族を呼び大泉町に定住すると、日本人住民との接触が増え、外国人

への不満や不快感が生まれ始めた。外国人の生活の変化から（調査対象者25）のような意識が生まれている。一方で、調査対象者27は、外国人が家庭をもって落ち着いたと話し、外国人が家庭を持ったことで日本に馴染んだ生活を送るようになり、このことをポジティブに捉えている。

その他の意見として、「ゴミの出し方などのルールを行政が指導してこなかったことが悪い」という行政の外国人に対する支援を不満に

表7 外国人との接点に関する語り

調査対象者	外国人の変化に関する語り
15	10年前くらいは、公共の施設で唾を吐く外国人ばかりだった。ゴミ出しもひどかった。10年前よりはマナーが良くなっている。
17	外国人は昔よりもいい印象になってきた。外国人も日本の決まりや日本人に慣れて来たのでは。
18	外国人も日本の習慣に慣れてきたのでは。
21	数十年前に比べるとマナーを守るようにしていると感じる。いまだにゴミ捨て等守られていない(注意するとどんな反応があるか怖い、諦め) 外国籍の子供が学校で日本のスタイルを学び日本よりの思考へ変化してきた。子供が親へ少し伝わっている気がします。
25	今は家族で来ているからマイナスな人が入ってくる。前は仕事をしに来る人ばかりだったから平和。
27	外国人が日本の習慣に慣れてきた。家庭をもって落ちついた。

注) 調査対象者の番号は表2に対応する。
(聞き取り調査により作成)

思う日本人住民もいた。大泉町では1991年からごみステーションでのゴミの出し方についてポルトガル語のチラシを配布しており(野山1997)、広報にもポルトガル語表記のゴミの出し方についてのポスターが掲載されている(図6)が、現在でも外国人住民のマナーの悪さを感じている日本人住民もいる。

4. 外国人住民のもつ意識

4-1. 調査対象者の属性と外国人住民の性質

大泉町に住む外国人住民に対してアンケート調査、聞き取り調査を実施した。実施日は2017年9月24日と10月22日、11月25日、26日であり、大泉町観光協会主催の「活きな世界のグルメ横丁」、大泉町町内のブラジルレストランでアンケートと聞き取り調査を実施した¹²⁾。

アンケート調査は全13問である。Q1からQ4は個人の属性について、Q5、Q8からQ10は来日目的や大泉町に住むまでの経緯や帰国意思について聞いた。Q6とQ7は日本人への印象や意識、Q11は日本人との接点についての設問である。Q12とQ13はリーマンショックや東日本大震災の影響についての設問である。

表8に示した通り、調査対象者のうち8名がブラジル人(日系ブラジル人含む)であった。年齢は30歳代が3名、40歳代が3名、50歳代が2名、60歳代が2名である。性別は男性が4名、女性が7名である。来日年は1988年から1999年である。来日して最初から大泉町で生活しているのは2人だけであり(表8:調査対象者6、

■資源ごみの分け方・出し方(ポルトガル語)



図6 ポルトガル語によるゴミの出し方に関する説明

(「広報おおいずみ 832 号」(2016 年 4 月 10 日発行)を転載)

表 8 大泉町における調査対象の外国人属性 (n=11)

調査対象者	国籍	年齢	性別	現在の職業	来日年	大泉町 転入年	来日 目的	国内移動歴	大泉町への転入理由
1	ブラジル	30代	男	会社員	1992	2001	b	三重県→大泉町	仕事の関係
2	ブラジル(日3)	40代	女	接客業	1990	2001	a	足利市→大泉町	子どもの就学
3	ブラジル(日2)	50代	男	会社員	1989	1999	a	大泉町→桐生市→大泉町	仕事の紹介
4	ブラジル(日2)	60代	女	日本語指導助手	1989	1993	a	静岡県→ブラジル→大泉町	仕事の関係
5	ブラジル	30代	女	派遣社員	1994	2015	a	栃木県→茨城県→埼玉県→伊勢崎市→大泉町	子どもの就学
6	ブラジル(日3)	20代	女	大学職員	1995	1995	b	足利市→太田市→大泉町	転々としながら見つけた
7	ブラジル(日3)	30代	男	自営業	1999	2008	a	宮崎県→名古屋→大泉町	仕事の紹介
8	ブラジル(日2)	40代	男	アルバイト	1991	1997	c	沖縄県→ブラジル→大泉町	仕事の紹介
9	韓国	60代	女	ヘルパー	1988	1988	c	—	—
10	ペルー	50代	女	会社員	1991	2015	d	埼玉県→大泉町	仕事の紹介
11	トルコ	40代	男	会社員	1998	—	e	—	—

注 1) 国籍の日 2 は日系二世、日 3 は日系三世であることを示す。

注 2) 来日目的の a は仕事のため・お金を稼ぐため、b は家族が日本にいたから・親の出稼ぎについてきた、c は日本で楽しい生活を送るため、d は自国の治安が悪くて逃げてきた、e は日本に遊びに来たのを機に定住を示す。

注 3) 「—」は不明であることを示す。

(聞き取り調査より作成)

〈表面〉

〈裏面〉

図 7 外国人向けの求人広告

9)、その他は大泉町以外の地域での生活を経験してから大泉町へ転入してきた。来日目的をみると「お金を稼ぐため」が 4 人、「親の出稼ぎについてきた」が 1 人と、日本で金銭を稼ぐことが目的である人が多い。しかし、現在、帰国意思はなく、来日時が出稼ぎ目的であった人も、その目的は変化し日本で生活していくことを望んでいた。また、「日本で楽しい生活を送るため」(表 8: 調査対象者 8、9)、「自国の治安が悪く逃げてきたため」(表 8: 調査対象者 10)というように、生活環境を求めて

来日している人もいる。また、外国人住民は、来日してから日本国内を移動している。大泉町各所に置いてあるポルトガル語表記の求人広告(図 7)には日本各地の求人情報が掲載されており、外国人住民の中には、より良い給料を求めて各地に移動する人もいるという。特にブラジルなどに比べると、日本の面積は小さいため、ためらいなく日本各地を移動する外国人も多く、日本人よりも移動性が高い。しかし、近年では金銭の問題よりも働きやすさを重視している外国人も増え、移動ばかりするのではなく、

表9 外国人の日本人への印象と意識

調査対象者	来日時の日本人の印象	印象が変わった要因	現在の日本人の印象
1	話しかけづらい	—	変わらない、それでいいと思う
2	冷たい	子どもの保護者として学校での日本人との付き合いができたから。	良くなった
3	親切な人、冷たい人色々いた	—	外国人に慣れてきた感じがある
4	話しかけづらい	—	外国人に慣れ、オープンになってきた
5	冷たい	子どもができて、日本人のお母さんに関わるようになったから、一緒に出掛ける人ができたとき。	良くなった、明るくなった、話せるようになった、一緒に出掛けるようになった。
6	話しかけづらい、怖い	自分が日本語を話せるようになったため。	いろんな人がある
7	親切	文化の違いに慣れると日本人と同じに感じる。日本人と同じように生活できるレベルになったとき。	自分が文化の違いに慣れると自分と同じに感じる。
8	話しかけづらい、怖い	2000年くらいから町での日本人の様子が良くなってきたと感じた。	日本人が明るくなった
9	親切	—	親切
10	ルールを守る人、優しい	—	日本人がオープンになった。
11	特になし	—	特になし、自分の国の人と一緒

注) 調査対象者の番号は表8に対応する。

(聞き取り調査より作成)

慣れた住みやすい大泉町で生活している人も多い¹³⁾。

4-2. 日本人住民に対する外国人住民の意識

表9は、日本人住民に対する外国人住民の意識をまとめたものである。外国人住民の語りの中には、日本人住民との接触を避けたり、日本人住民に対する不満は一つもなかった。外国人住民は、目的をもって日本で生活している。リーマンショックで友人や家族が仕事を失い、身近な人が帰国を余儀なくされたり、東日本大震災後にはでたらめな情報が自国に流れ、帰国を促されたりと、日本での生活が妨げられるようなことも度々あったという。そのような中でも、日本で頑張って生活したいという強い思いから日本に残っている人が多い。

表9をみると来日時の日本人の印象として、冷たい、話しかけづらいと感じていた人が多いことがわかる。印象が変わった要因は2つあった。1つは、自身が日本の文化に慣れ、ある程度日本語を習得し、日本人と同じであると実感するようになったときである。もう1つは、子どもを通して日本の学校での保護者同士のつながりができた時である。自ら日本の文化や言葉、生活スタイルに慣れ、日本人住民と同等にみられるように努力していた。そして、日本人住民とネットワークができ深く接する機会を

得るのが、子どもを通じた日本の学校での保護者どうしのつながりである。

ここでは、3名の外国人住民の意識を彼らの生活の変化と重ねて詳しくみていこう。

1) 調査対象者7番 日系3世ブラジル人男性

7番の男性は、1999年来日した。野球世界選手権ボーイズリーグ・ブラジル代表でスカウトされ、宮崎の野球強豪高校へ入学した。スカウトされたときは、日本に行けることが嬉しく、すぐに渡航準備に取り組んだという。ブラジルでは、野球をすることはとてもお金のかかるスポーツであったためである。ブラジルでの野球道具は日本から輸入しているものが多く、価格が高い。またブラジルは面積が広いので、試合の遠征などでは、移動費だけでも費用がかさんだ。

7番の男性は、来日してみて日本語を話せないことに気づいたという¹⁴⁾。2002年に高校を卒業した後、プロ野球球団に入団し、名古屋市で生活を送った。この頃までは、自分が日本語や日本の文化に慣れるのに精いっぱいだったという。その後2005年にプロ野球を辞め、日本で新たな仕事を探すことになり、この頃から日本人に対する意識が変化していった。来日当初から日本人は親切であったといい、日本人に良い印象があったようだ。しかし、自身が文化の違いに慣れ、日本人と同じであると感じながら

生活できるレベルになったとき、はじめて日本人と自分が同等であると感じたという。

その後、愛知県内で語学学校の講師として働き始めた。そして7番の男性が運営する語学学校の情報を得た大泉町の商業施設から連絡があり、大泉町で語学学校を開かないかと誘いを受け、2008年に大泉町へ移住した。移住するにあたり、大泉町で語学学校を開いたとして、生徒を確保できるのか不安であり、数回下見に大泉町を訪れたという。愛知県とは違い、交通手段が電車ではなく自動車であり、語学学校の存在に気づいてもらえるのか心配であった。移住は賭けであったという。大泉町に移住して、大泉観光協会の「活きな世界のグルメ横丁」や東京などで開催されている催し物に、ブラジルの食べ物であるパステウ¹⁾を売ようになった。キッチンカーで移動販売をしていた。次第に移動販売が人気になり、店舗はないのかと客に尋ねられるようになったそう。そこで、日本人にブラジルの味を食べて欲しいという思いから、2015年大泉町の坂田2丁目にレストラン・バーを開いた。開業資金をなるべくかけないように、借金をしなくて済むように、内装等を全部自力で手がけた。日本人が利用しやすいよう、客が見え安心して利用することができるようにテラス席を作るなど工夫をしている。

2) 調査対象者8番 日系2世ブラジル人女性

調査対象者8番の女性は1991年に父親と母親、兄2人と本人の家族5人で来日した。母親がブラジル人である。父親が沖縄県出身であったため、来日当初は沖縄県で暮らしはじめた。長兄は、仕事の関係で神奈川県に、次兄は大泉へ移動し派遣会社で働いていた。調査対象者8番の女性は一度ブラジルに帰国したが、1997年に先に大泉で生活していた次兄に仕事を紹介してもらい、8番の女性も大泉で会社に就職し、生活するようになった。この頃、町内のスーパーなどで日本人と接触すると、偏見の目で見られていると感じたという。2000年頃から、町内で接触する日本人が明るくなって親しみやすくなったと感じるようになった。2015年6月からは、調査対象者7番の男性が運営するレストラン・バーのキッチンで働くようになった。7番の男性の妻と知り合い、誘われたためであ

る。そして、人に雇われるのではなく自分で働きたい、やりたいことをしたい、知識をつけて成長したいという思いから、女性は同年8月に会社を退職した。

3) 調査対象者5番 ブラジル人 女性

調査対象者5番の女性は1994年、14歳の時に母親と2人で来日し、仕事があった足利市に住みはじめた。周囲のブラジル人で日本の学校に通っている人がいなかったため、来日して14歳で働き始めた。その後母親と茨城県、埼玉県、群馬県伊勢崎市と仕事が変わるたびに移動していたが、2012年から大泉町に住むようになった。現在、中学生と小学生の子どもがおり、大泉町はとても住みやすいと感じている。以前住んでいた所に比べて大泉町では住民税が高く、時給も安いものの、同じ境遇の外国人住民が近くにいたり、大泉町は子どもの通う学校に通訳がいたりすることで、調査対象者5番の女性は住みやすさを感じている。来日時の日本人は冷たい印象があったが、現在では子どもができて日本人の母親と関わるようになり、一緒に出掛けるほどになったそう。現在、派遣の仕事に加えて調査対象者7番の男性が運営するというレストラン・バーでのアルバイトを不定期でしている。

上記3名の外国人住民は、来日した当初から大泉町に住んでいるのではなく、居住地を転々としてから大泉町に住むことになった人である。大泉町に来る理由は仕事があること、子どもを育てるのによい環境があること、自分と同じ境遇の人とのネットワークができることなどいくつか理由がある。しかし共通して言えることは、単に仕事として金銭を稼ぐ出稼ぎが主たる目的ではなく、ある程度の稼ぎを求めつつも、それよりも周囲の人との繋がりを優先し大泉町に住んでいるということである。このことは、戸井田(2005)の「ブラジルを発つ日系人労働者にとって、日本のどの町を目指すかの最大の基準は、就労先の有無でなく、(中略)親戚や知人の有無が関係する」という指摘とも合致する。

本稿の調査対象者は外国人労働者だけではないが、2)および3)の外国人住民にもみられるように、外国人住民は、親戚や知人の動向に影響を受けていることが明らかとなった。また、日

本人に対し当初は冷たいなどと言った印象を持っていたが、現在では日本人住民に対して不満を感じている様子は見られなかった。それぞれの生活の中で、日本人と深い交流の場をもつことで、自身の日本で生活する上での能力を身につけ、日本で日本人と親しみをもちながら生活しようとしていると思われる。

5. 大泉町における日本人住民と外国人住民をつなぐ存在

5-1. 組織による日本人住民と外国人住民をつなぐ役割

大泉町において日本人住民と外国人住民をつなぐ組織として、行政および大泉観光協会、大泉国際交流協会がある。以下では、これらの組織の役割をみていく。

1) 行政

大泉町は、日本人住民と外国人住民のよりよい暮らしの実現のためにさまざまな施設を設けている。その中の一つである多文化共生コミュニティセンターは、大泉町国際協働課に設置されている。多文化コミュニティセンターは、日本の制度や習慣、文化をはじめ、日本語学習

の案内など「秩序ある多文化共生」のためのさまざまな情報を発信しており、大泉町公民館南別館1階の一部スペースに設置され、外国語で書かれたさまざまなパンフレットを常備している。多文化コミュニティセンターは、大泉町での外国人住民の暮らしを支援する相談窓口となっている。また、多文化コミュニティセンターのホームページには、生活上欠かせない情報が日本語とポルトガル語で記載されている。外国人住民に寄り添った公共施設であり、日本人の生活のルールを学び日本人住民と外国人住民の暮らしをよりよくしていくことを目的とした施設である。

次に、大泉町役場が発行している「広報おおいずみ」の外国に関する記事の掲載内容から、日本人住民と外国人住民、相互の関係性を読み解いていく(表10)。表10の「年間あたりの外国人に関する記事のある号の数」をみると、2008年頃から外国人に関する記事が増えていることが分かる。「外国人に関する記事」は、町長の政策の外国人住民との共生についての取り組みや、大泉町民からの外国人に関する意見、町内での外国人に関する取り組みなどである。「外国人向けの事務連絡」は、外国人住民に向けた、新入学外国籍児童の修学申請受付の連絡

表10 「広報おおいずみ」からみる外国人

発行年	外国人に関する記事	外国人向けの事務連絡	大泉国際交流協会の講座やイベントのお知らせや報告	大泉観光協会のイベントのお知らせや報告	大泉まつりに関するお知らせや報告	その他	年間あたりの外国人に関する記事のある号の数
2000年	2	1	8	—	1	—	8(12)
2001年	4	—	5	—	2	—	9(12)
2002年	10	—	4	—	—	—	13(21)
2003年	2	—	3	—	—	—	4(24)
2004年	1	—	5	—	—	—	5(24)
2005年	5	—	2	—	—	—	6(24)
2006年	5	—	3	—	—	—	9(24)
2007年	6	—	5	—	—	—	7(24)
2008年	10	—	9	—	1	—	13(24)
2009年	3	—	4	—	1	2	8(24)
2010年	6	—	3	3	2	—	10(24)
2011年	6	1	4	1	3	—	10(24)
2012年	4	4	6	1	2	—	12(24)
2013年	7	3	4	1	1	1	13(24)
2014年	6	1	4	1	1	2	12(24)
2015年	7	3	2	2	1	—	12(24)
2016年	10	1	3	5	2	1	14(24)
2017年	3	2	9	3	1	14	19(24)

注1) 「—」は記載がなかったことを示す。

注2) 発行号数は、2001年までが年間12号、2002年が年間21号、2003年以降は年間24号である。

(各「広報おおいずみ」より作成)

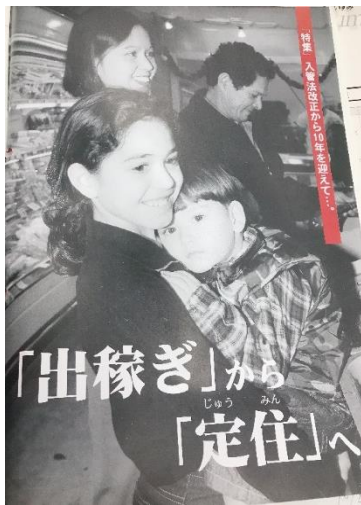


図8 定住化した外国人が
増加したことを示す記事
(「広報おおいずみ 480 号」
(2000 年 12 月 10 日発行)を転載)

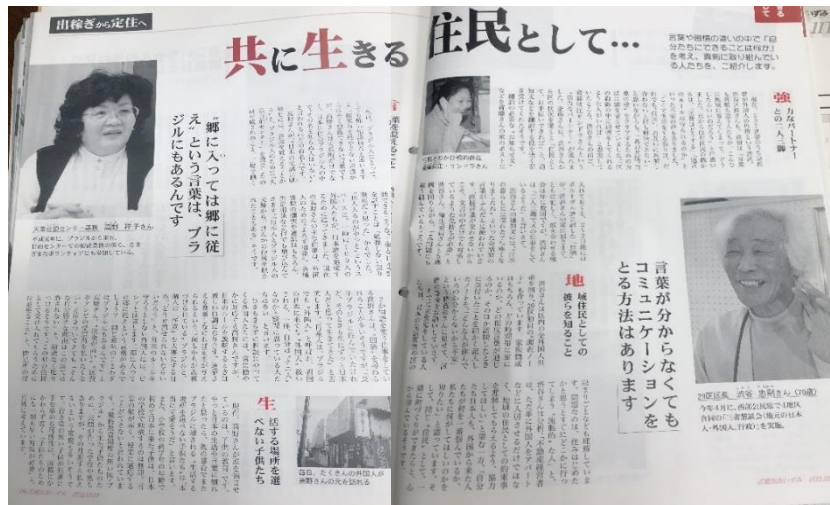


図9 外国人住民を支援する日本人住民に関する記事
(「広報おおいずみ 480 号」(2000 年 12 月 10 日発行)を転載)



図10 大泉国際交流協会主催の活動の
様子の記事
(「広報おおいずみ 550 号」(2004 年 7 月 10 日
発行)を転載)

や、外国人の住民基本台帳制度の開始を知らせる記載である。これらは 2011 年から記載がはじまっている。すなわち、外国人向けのお知らせが広報おおいずみに掲載されるようになった

たのである。このことは、外国人も大泉町に住む住民の一員として、捉えられるようになったことを意味すると思われる。

また数年ごとに、外国人住民について日本人住民が考えさせられるような記事が掲載されている(図8、図9)。内容として、外国人住民へのインタビューと、外国人住民に交流のある日本人住民の紹介である。「みんなの扉」というコーナー(図10)や「ふれあい座談会」というコーナーは2001年から続いている。これらは、日本人住民の視点から感じていることを投稿し、皆で考えようと問題提起するようなコーナーである。特に、外国人住民に対する問題を取り上げていることが多く、日本人住民が外国人住民に対して感じていること、対策が必要であると感じていることが読み取れる。

大泉国際交流協会が主催する講座やイベントの案内や報告は毎月掲載されている。外国人住民に向けて広報で情報を発信していることもあるが、広報は日本語表記のため、日本人住民に向けた情報でもあったと考えられる。

このように、大泉町が発行する「広報おおいずみ」は、日本人住民が外国人住民とのありかたを考えるきっかけとなる記事が多い。主に日本人住民の視点から日本人住民側の外国人住民への模範的な寄り添い方や、互いの交流と図ろうとするイベントを紹介している。このよう



写真1 「活きな世界のグルメ横丁」の出店
店舗

(2017年11月26日筆者撮影)

な記事が多いのは、日本人住民が外国人住民を寛容的に思っておらず、互いの交流が少ないということを示唆している。町としても、日本人住民が外国人住民のことを理解し、支援するような意識を求めていることがうかがえる。

2) 大泉町観光協会

大泉町観光協会は「活きな世界のグルメ横丁」や「大泉カルナバル」というサンバやブラジリアンショーがメインの観光イベントを年に1回主催している。これらのイベントは、外国料理が気軽に食べられることが魅力の一つである。「活きな世界のグルメ横丁」は、2004年4月から町内の「いずみ緑道花の広場」で開催されており、ブラジルやペルー、ロシア、日本などさまざまな国の約30店舗が出店している(写真1)。外国料理の出店の多くは外国人が運営している。「活きな世界のグルメ横丁」の目的は、大泉にしながら日系ブラジル人をはじめ、ペルーやネパールなどの約50の多文化を身近で感じる町で国際交流の場として、世界の味が楽しめる憩いの広場として定着することである¹⁶⁾。

また大泉町観光協会は、希望に応じて大泉町のツアーを計画、案内をしたり、サンバダンス

一の派遣の窓口ともなったりしている。大泉町観光協会は、日本でブラジルを体験できる町になるよう取り組んでいる。大泉町観光協会は、観光イベントを通し、日本人住民と外国人住民の交流の場を作り、相互をつなげるきっかけづくりをしている。

3) 大泉国際交流協会

大泉国際交流協会は、1995年7月1日に町内レベルでの国際交流を推進するため、大泉町のバックアップのもと、民間団体として設立された。町民全体が会員であるとの理念にもとづいて活動しており、会員制度はとっていない。事業の計画と実行はボランティアによって進められており、活動の財源は、町からの補助金と協会の活動への賛同者からの賛助金でまかなわれている。語学講座には、日本語能力試験NIN2受験準備コース、日本語講座通年コース、英語サロン、日本語の教え方講座、地域外国人教育支援、多言語サロンなどがある。

多言語サロンは、毎週土曜日午前9時から大泉町立図書館で開催されている。イベント事業では、外国人との交流推進事業として、初級英会話講座とポルトガル語講座、スペイン語講座、ネパール語講座、講師スキルアップ研修、料理教室がある。また、群馬県観光物産国際協会、大泉町等と共催で、外国人のための法律相談も開催している。

外国人住民は、各講座を受講するとともに、日本語と外国語の両方を話せる講師などを頼りに、日常生活で困っていることなどを相談している。外国人住民にとって、相談窓口のような存在となっている団体である。また、日本人住民のためのポルトガル語講座もあり、意欲的な日本人住民がポルトガル語を習得しに通っている。日本人住民と外国人住民が、言語習得を通して、つながりがもてるような支援をしている団体である。

5-2. 日本人住民と外国人住民をつなぐ個人の役割

大泉町には、組織レベルだけではなく、個人で意欲的に日本人住民と外国人住民をつなげようとしている人がいる。相互を結びつける仲介者としての働きが見られることから、それら

の人物をメディアエータ¹⁷⁾と呼ぶ。以下では、日本人のメディアエータと外国人のメディアエータが果たす役割について取り上げる。

1) 日本人メディアエータ

大泉観光協会の副会長を務めるO氏は、社会保険労務士として日系ブラジル人や外国人を法的側面から支援している。外国人が日本で生活するうえで、さまざまな問題がある。それを法的な視点から多くの外国人をバックアップしてきた。O氏はたくさんの外国人と接してきた。人との関わりを大切にしているという。「外国人も日本人も同じ人間である。ある程度の言葉の習得や理解も必要だが、何よりも心のつながりが重要である」と話す。外国人住民は、リーマンショックをきっかけとしてさまざまな法律を知り、特に就労に関する法律で自らを守り、日本で生活していけるように努力している人が増えたという。近年、雇用に関する権利の主張が大きくなっているという。

A氏は、「活きな世界のグルメ横丁」で、ブラジル料理の店舗で外国人店員に混ざって接客を担当していた日本人男性である。A氏は、普段は会社員として働いているが、この店の日系ブラジル人の店主と出会い、意気投合し、休日の出店を手伝うようになったという。外国人店員も日本語が話せるが、A氏は「日本人店員がいることで、大泉観光協会などイベントの各所関係者や日本人観光客とのコミュニケーションがスムーズになれば」と話す。

I氏は、大泉国際交流協会の会長を務めている。I氏は外国人集住都市会議で大泉国際交流協会の活動を報告し、よりよい街づくりのために働きかけている。また、大泉町のポルトガル語の広報紙GARAPA(ガラッパ)(図11)作成の第一人者でもあり、外国人住民と日本人住民を支えている人物である。

T氏は大泉国際交流協会が開く多言語サロンでポルトガル語を受講している男性である。ま

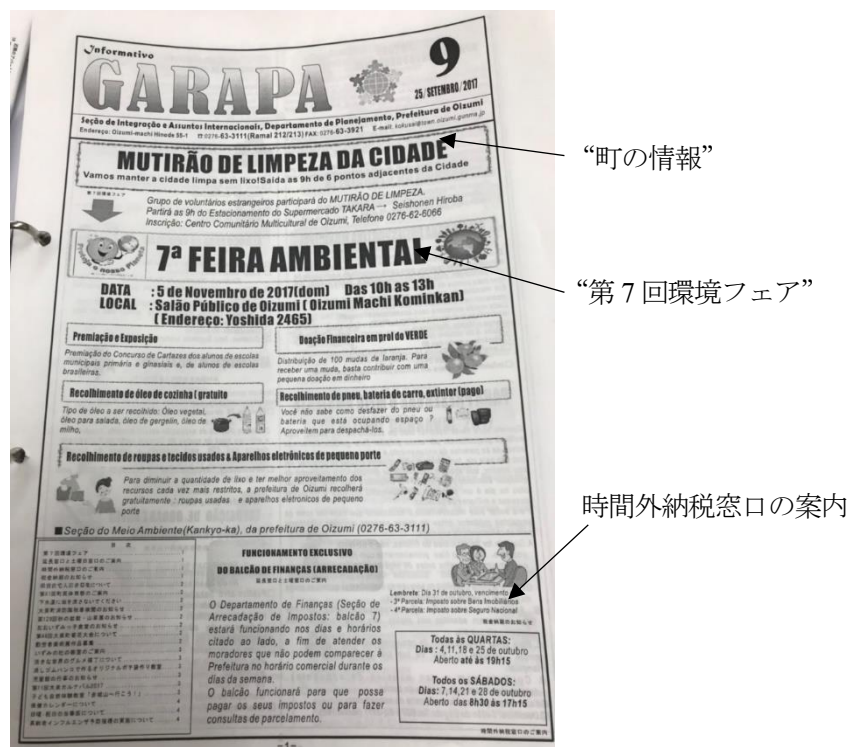


図11 ポルトガル語の広報誌

ガラッパには町の情報が記載され、この号では大泉町公民館で開催される環境フェアの案内や時間外納税窓口の案内などが掲載されている。A4用紙裏表で構成されている。

(「ガラッパ9月号」大泉国際交流協会2017年9月発行を転載)

た、「娘の会」という多言語の読み聞かせを行う団体を結成し、日本に住む外国人住民のために活動をしている。大泉国際交流協会が主催している小学生、中学生を対象とした勉強会にも講師として参加している。

S氏は普段は警察官として働いている男性である。大泉町で勤務していたとき、よく日本人から外国人住民に対する不満の110番通報が来ていたという。その一つとして、近所の教会の讃美歌がうるさいという日本人住民からの通報が3回もあった。その一報を受け、S氏がその教会へ訪ねると、牧師は「うるさかったり、迷惑であつたりするのなら、私たちに直接言ってくればいいのに…」と話したという。それを聞いて、S氏は日本人住民と外国人住民のコミュニケーション不足を感じた。外国人住民は、日本人住民から不満を持たれることが多いが、外国人住民は日本人に歩み寄りたいという気持ちがあることを知ってほしいと思った。そこで、2011年から大泉町警察署生活安全課主催の町の清掃活動を始めた。現在では年に2回、春と秋に清掃活動が継続されている。地域の住民の声をくみ取り、日本人住民と外国人住民の相互理解のために行動し、地域を支援している人物である。S氏自身も、大泉国際交流協会が開く多言語サロンでポルトガル語を勉強し、外国人住民とのコミュニケーションがとれるよう励んでいた。一言、ポルトガル語で話しかけるだけで、相手の捉え方が変わってくるという。「自分を理解しようとしてくれているのでは、という意識を持つようになる。両者が互いに意思疎通できる機会が重要なのでは」と話す。

2) 外国人メディアータ

T氏は大泉観光協会の事務スタッフをしている女性である。T氏の両親は日系ブラジル人である。日本の学校に通い、日本人と同じ教育を受けるとともに、小学校2年生から6年生までは放課後にブラジル人学校に通っていた。家庭ではポルトガル語を話すことが多かったという。T氏は日本語とポルトガル語の二か国語を話せることが、イベント運営には欠かせない。イベントに出店するのは大泉町やその周辺に住む外国人が多い。そうした外国人は比較的日本語を習得しており、イベントでは日本人観光

客相手に接客をしている。しかし、イベントを運営するにあたり、日本語だけでは外国人に伝わりきれない事柄も多くあり、その時に、日本語もポルトガル語も話せるT氏の存在がとても大きい。

T氏がポルトガル語で話をする中で、外国人出店者は安心してイベントに参加することができるという。T氏は「日本人が主催しているイベントに外国人にも共感を得て参加してもらうためには、外国人に寄り添い、意思疎通が十分にできるような環境が無ければならない」と話す。その環境を構成していくには、T氏のような、日本人と外国人の架け橋となる人物の存在が重要である。T氏は、「観光協会としては、大泉町の特徴であるブラジルを今後とも観光に活かしつつ、50か国もの国籍の方々が住んでいるので、ブラジルだけでなく、今後は更にインターナショナルな町となるように、国際的なイベントをしていきたい。」と話す。

Y氏は日系ブラジル人の女性で、大泉国際交流協会が主催の言語サロンで講師をしている。大泉町の小学校で日本語指導助手としても働いている。大泉町立図書館で開かれる多言語サロン(写真2)では未就学児や小学生、中学生、大人の外国人住民が主に日本語の学習をしている。日本人住民向けの、ポルトガル語講座も同時に開催されている。特に外国人住民の未就学児と小学生は、学校に入学する前に言語サロン



写真2 多言語サロンのポルトガル語講座の様子

Y氏は写真中央奥の立っている女性である。日本人にポルトガル語を教えている。

(2018年1月6日筆者撮影)

で日本語を学習するよう、大泉町の教育委員会から指導されている。Y氏は主に日本人住民に向けたポルトガル語講座の講師をしている。

外国人住民の多くはY氏に相談事があるとき、Y氏を訪ねて言語サロンに来ることもある。学校で配られる便りに書いてあることで分からないことを聞いたり、日常生活で困っていることを相談したりしていた。言語サロンは、単に言葉を習得するだけの場ではなく、外国人住民が日本社会で日本人住民と一緒に生活していく上での情報を得る場である。Y氏のように、外国人住民、日本人住民のどちらとも接点があり、どちらのコミュニティにも属している人によって、相互を受け入れ、相互が寄り添えるような環境が生まれている。

日本人住民を対象にしたポルトガル語講座には、ポルトガル語を取得することが必要だと感じ、勉強している日本人住民が通っている。

3) メディエータの役割

メディエータは日本人住民と外国人住民を繋ぐ人であるが、詳しく検討すると、双方を往来するメディエータと、日本人住民と外国人住民どちらかへのアプローチが強いメディエータがいる。双方を往来するメディエータは日本人メディエータのS氏、外国人メディエータのT氏、Y氏である。T氏とY氏は、ポルトガル語と日本語が話せることを活かし、外国人住民と日本人住民の両方を繋げている。S氏は、日本人住民と外国人住民の思いと疎通させようと、双方を繋ぐ役割を担っている。

O氏とA氏、T氏は日本人であるが、外国人住民へのアプローチが強いメディエータである。日本人の視点から、外国人住民をサポートし、日本人と同様に生活できるようバックアップしている。O氏のように、法的手続きの際に日本人が手を差し伸べることは、外国人住民にとってとても大きな存在であるといえる。I氏は、直接的に人をサポートするのではなく、組織の運営で外国人住民を支援している。そのため事業に参加してくれる日本人住民や外国人住民とのネットワークを形成している。そういった意味での双方を繋げる重要な役目を果たしている。大泉町では日本人住民と外国人住民の相互を繋げるために、このような意欲的な人

がいることが分かった。

6. おわりに

本稿では、大泉町を対象に日本人住民と外国人住民の相互意識について分析し、その変化の要因について検討してきた。また、日本人住民と外国人住民をつなぐ存在である組織や人物の活動にも着目した。その結果、明らかになったことは以下の通りである。

日本人住民の外国人住民に対する意識には、ネガティブな意識が多かった。日本と外国の習慣の違いから生じるマナーについて、日本人が不快に思い我慢しているという意識が強い。しかし、「月日が経って外国人を気にしなくなってきた」という日本人住民の語りに見られるように、外国人が大泉町に住みはじめて約30年が経った今、外国人に寛容的になっている人が増えているともいえる。日本人住民の外国人住民への意識が変わるタイミングとして、日本の学校を通した子どもどうしのやり取りがあった。本来ならば日本人住民と外国人住民の保護者どうしが連絡を取ればよい内容も、日本の学校で日本人と接することに慣れ、言葉も通じやすい子どもを通して連絡を取るということも見受けられた。また、外国人住民によい印象をもっている日本人は良い外国人住民と出会い、その人の印象が外国人住民全体の印象となっている。またその逆もある。日本人は外国人を一人の人として見ているのではなく、外国人全体をよそ者と感じていることが分かった。調査対象者一人一人の内面に迫った聞き取り調査によって、濱田(2008)による統計分析ではみることができなかった外国人住民に対する複雑な意識や、意識が変化するタイミングなどを明らかにすることができた。

外国人住民のもつ日本人住民に対する意識には、ネガティブな意識がほとんどなかった。日本人住民のことをどう思うかという意識ではなく、外国人住民が日本で生計を立てて生活したいという思いをもって日本で働き暮らしていた。喜多川(1995)や渡辺(1995a、b)、片岡(2014)では外国人労働者の生活構造や意識に着

目し、ホスト社会での外国人労働者の実態を明らかにした。外国人住民のホスト社会における生活の様子は明らかになったが、日本人住民に対してどのような意識を持ちながら生活しているのかは明らかにされてこなかった。この点に関しては本稿の成果である。また、先行研究では、外国人労働者を調査対象としていたが、本稿では外国人住民について職業にとらわれず調査した結果、大泉町で暮らす理由は、仕事があることのほかに、同じ境遇の外国人が多くいること、子どもを育てやすいことにあった。特に、同じ境遇の外国人が多くいることは彼らにとって重要であり、日本で生活するにあたり分からないことを聞く相手が身近にいることが安心材料となっている。外国人住民は、外国人どうしのネットワークを求めて大泉町で暮らしていることが分かった。また、外国人住民と日本人との大きな接点として、職場と学校があった。職場や学校が日本人住民と同じであると、そこで日本人ネットワークとの関わりが生まれていた。

メディアータについては、調査対象の日本人住民、外国人住民から直接的な発言はなかった。大泉町の中でメディアータとしての役割を担っている人は少数であるが、表9にあるように、「外国人の日本人への印象が変化する要因」は、子どもを通して保護者としての日本人との付き合いと、自身が日本語や日本の文化に慣れることにあった。それをサポートできるのは、日本のことについて教えてくれる日本人メディアータと外国人メディアータである。日本人住民、外国人住民にとって、メディアータは両者の意思疎通をスムーズにする役割を果たしていた。外国人が大泉に住みはじめて約30年が経ち、今後は外国人住民の高齢化という問題を支援していく必要も出てくるだろう。行政はメディアータを巻き込みながら、日本人住民と外国人住民の相互意識の差異を考慮した外国人施策を考えていく必要がある。

本稿では、ホスト社会である日本人住民と外国人住民の両者からの見解を検討することで、相手に持つ意識に相互関係はないことが明らかとなった一方で、相手への意識の変化のタイミングは、日本人住民と外国人住民に共通して、

学校や職場などで相互の交流機会をもつと相手への意識がポジティブなものに変化することが多かった。相互に深い関わりが生まれた場合には相手に対する意識が良好に変化していた。本稿の成果が、多文化共生社会の構築に寄与することを願う。

謝辞

本論文は、2017年度に上越教育大学学校教育学部提出した卒業論文の一部である。調査にご協力いただいた大泉町の方々、大泉観光協会のT氏およびO氏、大泉国際交流協会のI氏、ブラジル料理店 KAMINALUA の皆様には大変お世話になりました。また、本研究を進めるにあたり、上越教育大学の橋本暁子先生にご指導いただきました。以上、記して心より御礼申し上げます。

(上越教育大学 学校教育学部 2017 年度卒業)

注

- 1) 大泉町を題材とした書籍に水野(2016)がある。2年にわたる大泉町の調査で筆者と巡り合った大泉町の人々を取り上げたエッセイである。出会った人々についてとても詳しく聞き取りが行われているが、質問内容など不明な点も多いため、本稿では引用しなかった。
- 2) 戸井田(2005)によると、外国人集住都市会議は、静岡県浜松市の呼びかけによって2001年に結成されたものである。
- 3) 大泉町国際協働課提供資料による。
- 4) 総務省「平成29年1月1日住民基本台帳人口・世帯数」による。
- 5) 大泉町(2018)による。
- 6) 以下、東毛地区雇用安定促進協議会に関する説明は、喜多川(1997)を元に記す。
- 7) 大泉町国際協働課提供資料による。
- 8) 大泉町国際協働課提供資料による。
- 9) 大泉町観光協会O氏への聞き取りによる。

- 10) アンケート調査は 28 人を対象とし、アンケート調査とともに聞き取り調査を実施したのは 28 人のうち 23 人である。アンケートは、各場所で筆者が声をかけ、調査協力の賛同を得た大泉町在住の日本人住民に配布し、調査した。聞き取り調査は、アンケート調査をした人で聞き取り調査にも協力してくれた人に実施した。
- 11) 実際に、2017 年 9 月 24 日に開催された「活きな世界のグルメ横丁」において、イベントに来ていた日本人 6 人にアンケート調査をしたところ、大泉在住日本人は 6 人のうち 1 人であった。
- 12) 筆者が声を掛け調査に協力してくれた 9 人にアンケート用紙を配布し回収した。また、9 人中 8 人に追加で聞き取り調査を実施した。
- 13) 大泉観光協会の O 氏への聞き取りによる。
- 14) 水野(2016)では、日本への出発のわずか数日前に日本語が全く話せないことに気づいたと記載されている。
- 15) 小麦粉を練って作った薄いパスタのような生地、ひき肉やチーズ、玉ねぎなどを細かく切った具材を包み、揚げたブラジルの家庭料理である。
- 16) 大泉町観光協会の T 氏への聞き取りによる。ただし、T 氏によれば、イベントに対する大泉町に住む日本人の反応は、「比較的町外のお客さんの方が興味を持ってもらえる。町内の人は外国籍の人がいるのが当たり前なので、それほど興味がないのかもしれない。外国籍の人に対して、あまりいい印象がない人も少なくないので、そういったイベントに反対の町民もいるため、町内の人はそれほど積極的でないのかもしれない」という。
- 17) 日本においてメディアエータという語を用いた研究として神谷(2005)と藤田(2003)がある。神谷(2005)は、北海道在住の外国人への日本語支援活動と地域、自治体、専門家を結び、日本語活動の参加者が自立し、新たな世界(コミュニティ)へと導く橋渡しをする媒介者に対してメディアエータという語を用いた。藤田(2003)は、地域の日本語教育において、①日本語教室と行政をつなぐ、②日本語教

室と地域をつなぐ、③教室参加者の自立のために新たな世界へと導き、橋渡しをする存在を「媒介者」として捉え、メディアエータという語を用いた。本稿で「仲介者」の意味で「メディアエータ」を使用した意図として、神谷(2005)や藤田(2003)のように、外国人(日本語教育受講者)の自立のために新たな世界(コミュニティ)へと導くという機能ではなく、日本人住民と外国人住民の相互をつなぐ存在としての役割があることを強調することにある。

参考文献

- 大泉町 2018. 『広報おおいずみ 874 号』.
- 大槻茂美 2006. 外国人接触と外国人意識——JGSS-2003 データによる接触仮説の再検討. JGSS 研究論文集 5: 149-159.
- 片岡博美 2014. ブラジル人は「顔の見えない」存在なのか? . 地理学評論 87: 367-385.
- 梶田孝道・丹野清人・樋口直人 2005. 『顔の見えない定住化』名古屋大学出版社.
- 神谷順子 2005. 北海道在住外国人への日本語支援活動にみる地域ネットワークとメディアエータの役割——北見・佐呂間地域の事例から. 竹田正直編『地域経済のグローバル化と大学教育の再編』37-46. 共同文化社.
- 喜多川豊宇 1995. 大泉町・浜松市における日系ブラジル人の生活構造と意識. 東洋大学社会学部紀要 32(3): 150-246.
- 喜多川豊宇 1997. ブラジルタウンの形成とディアスポラ——日系ブラジル人の定住化に関する 7 年継続大泉調査. 東洋大学社会学部紀要 34(3): 65-182.
- 総務省 2006. 多文化共生の推進に関する研究会報告書. http://www.soumu.go.jp/kokusai/pdf/sonota_b5.pdf (最終閲覧日: 2018 年 1 月 30 日)
- 戸井田克己 2005. 『日本の内なる国際化——日系ニューカマーとわたしたち』古今書院.
- 野山 広 1997. わかちあいのまちづくりへ向けての胎動. 駒井 洋・渡戸一郎編『自治体の

- 外国人政策——内なる国際化への取り組み』181-216. 明石書店.
- 橋元秀一 1997. 群馬県大泉町聞き取り調査. 日本労働研究機構編『外国人労働者が就業する地域における住民の意識と実態——群馬県大泉町・長野県上田市・宮崎県古川市の地域研究』(調査報告書 NO.96) 29-76. 日本労働研究機構.
- 濱田国佑 2006. 地域住民の外国人との交流・意識とその変化——群馬県大泉町を事例として. 『調査と社会理論』研究報告書 22: 7-13.
- 濱田国佑 2008. 外国人住民に対する日本人住民意識の変遷とその規定要因. 『社会学評論』59: 216-231.
- 福本 拓・藤本久司・江成 幸・長尾直洋 2015. 集合的消費の変質に着目した外国人受入れ意識の分析——三重県四日市市の日系ブラジル人集住地区を事例に. 『地理学評論』88: 341-362.
- 藤田美佳 2003. 地域ネットワーキングにおけるメディアータの機能「のしろ日本語学習会」の取り組みを元にして. 『異文化間教育』18: 28-35.
- 水野龍哉 2016. 『移民の詩——大泉ブラジルタウン物語』CCC メディアハウス.
- 山本かほり・松宮 朝 2010. 外国籍住民集住都市における日本人住民の外国人意識——愛知県西尾市, 静岡県旧浜松市, 長野県飯田市調査から. 『日本都市社会学会年報』28: 117-134.
- 渡辺雅子 1995a. 『共同研究 出稼ぎ日系ブラジル人 論文編 上』明石書店.
- 渡辺雅子 1995b. 『共同研究 出稼ぎ日系ブラジル人 資料編 下』明石書店.